

【研究ノート】

嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解 (七)

黄色 瑞華

凡例

- 一 本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』(所収句八二二、他に俳諧歌一八)の全注解である。
- 一 一行めに『一茶発句集』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に()に入れて注した。
- 一 二行め以下に㊦として、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。
- 一 句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は、簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。
- 一 注釈史上、看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者名及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峯『名句評釈』」のように略記した。詳しくは稿末の「参考文献」を参照されたい。

一茶発句集

夏の部(承前)

涼風やちから一ぱいきりぐす

㊤ 七番日記(文政7・6)・文政版発句集

▽ 中七「力一ぱい」。

解 伸びきった青草の上を涼風が行く、その中できりぎりすが、「ギーツ・チョン」と精いっぱい鳴音をあげている。

▼ 川島『新釈』に、「きりぐすとこほろぎの呼び方については古来混じて居て、今のきりぐすと云とも伝へられて居るが、この句は理窟なしに、私達が現在きりぐすと呼んで居る「ギキース チョン」の、一際高い声を聞く。サツと吹来る涼風のたるみに乗るやうに、腹一杯の力を籠めて「ギキース チョン」とやる。一茶の句としては稀に見るカラリとした感じで、思ふことを吐出して了つたあとの、胸のスツとすくやうな気持がする。愉快な句である」。勝峯『名句評釈』に「夏の暑さも昼の梢に過ぎて、日漸く斜めにならうとする頃、颯と一陣の涼風が吹いて来たと思ふ途端にギイツス——チョンと一際高く鳴いた。この句からしてその鳴声を想像の耳で聞いても、夏の情景が眼先に浮び、涼風がさつと一吹き吹いて来るやうだ。暉峻『名句の鑑賞』に、「時は示してありませんが、明方か夜分でなければなりません。サツと吹き来る涼風に合わせて、蝨蝨が力一ぱい『ギースツチョン』と鳴き出す。見るからに爽かな快い句です」。萩原『一茶名句』に、「一茶らしい面白い味がある。『力一ぱいきりぐす』という表現をこの言葉だけで読むと、袋の中にとらえられたきりぎりすがのがれ出ようと、力一ぱいにもがいているようでもある。だが、上に『涼風や』とあるので、これは野の風が涼しく吹いている情景だとわかるから、きりぎりすはいかにも気持好きさそうに、力一ぱいの声をはりあげて鳴いているのだと合点される。不用意に『涼しさや』と書きそうなところを『涼風や』としたので、この句は生きている。ただし『力一ぱい』は『せい一ぱい』としたほうがよいのではないかと思う」。丸山『小林一茶』に、「日中の暑さも遠のいて、夕方に近い頃、サツと

吹いてくる涼風のたるみに乗るように、精一ぱいの力をこめて鳴いているさまである。『力一ぱい』は充実感がある。一茶には珍らしくカラツとした感じの句で、平明な口調のうちに張りがあり、爽快な句である。

すゞ風も隣の竹のあまりかな

㊤ 句稿消息・文政版発句集

▽ 句稿消息、上五「涼風も」。座五「あまり哉」。文政版、座五「あまり哉」。七番日記（文化12・6）、「涼風も隣の松のあまり哉」。

解 ころよいこの涼風も、隣家の竹が浴びた、そのあまりなのだ、の意。

拵た露も涼しや門の月

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 題叢・発句鈔追加、上五「拵へた」。

解 打ち水をした庭前に月影がさして、清々しい気分がただよっている、の意。

江戸住人

銭なしは春草も見ず門すゞみ

㊤ 八番日記（文政2・6）

▽ 中七「春草も見ず」は「青草も見ず」の誤りであろう。風間本八番日記、中七「青草も見ず」座五「門涼み」。梅塵本八番日記（文政2）、前書「江戸住居」。中七「青草も見ず」座五「川すゞみ」。

解 縁日で青草を買うこともできない「銭なし」は、門涼みが唯一の炎熱対処法なのである。七番日記（文化9・5）に、「銭出した程は涼しくなかりけり」。八番日記（文政2・6）に、「暑日や青草見るも銭次第」。

おく信濃に浴して

下々も下々、下々の下国の涼しさよ

㊦ 七番日記(文化10・6)、志多良・句稿消息

▽ 七番日記、前書なし。志多良・句稿消息、上五・中七「下くも下くくの下国の」。

注 「下国」、気候・風土に恵まれた国に対して言う。『おらが春』に、「おのれ住る郷ハ、おく信濃黒姫山のだらく下りの小隅なれば、雪ハ夏(え)きへて、霜ハ秋降る物から、橘のからたちとなるのミならで、万木千草上々国よりうつし植るに、ことくく変じざるハなかりけり」。「俳諧寺記」に、「雲の下の又其下の、下々の下国の信濃もしなの、おくしなの、片すみ、黒姫山の禁なるおのれ住る里ハ、」。

解 下々の下国、何の自慢もないが上々国もかなわない涼しさだけはあるぞ、の意。逆説的郷土愛。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「思ひきつた野調、重語と蠻声の連続の一風も二風も変つてゐるが為に人口に膾炙する。(中略)野人一茶が出てゐる。郷土的の自負が出てゐる。不公平の公平が出てゐる。負けじ魂が出てゐる。底を割った真の樂地が出てゐる。与へられぬ者に与へられた物が出てゐる。拘束されぬ自由の天地が出てゐる。仮面や、お上手や、遠慮気兼や、虚偽や、虚礼や、空文や、軽佻や、繁縛や四角四面な世界に得られぬ天与の賜物が出てゐる誰憚らず大の字にふんぞり返つて涼味を満喫してゐるのがこの句である」。荻原「一茶篇」に、「一国の天子のいます京都や、天下のお膝元である江戸や、そういうところに近い国を上国としたならば、信濃の国などは下国である。(中略)だがこんな『下下の下の下下の下国』にいれば、一日を暮らすのに金もかからず、他人に対する見栄を張る必要もなく、はだかでしたとて誰に恥じることもないのだから、こんな涼しいことはないのである」。川島『一茶集』に、「一茶は季候・文化に恵まれた地を上国と言ひ、それに対する下国であるが、ここでは反語めいた誇りとも見られる。奥信濃の涼しさを満喫して肩ひじ張つてもいる感じである」。中島『小林一茶集』に、「一年の半ば近くも雪にとざされる故郷を、一茶は卑下して、しばしば「下々の下国」と言っている。(中略)しかしながら御方便なもので、夏だけはことのほか涼しく、他国にくらべてしのぎよい」。加藤『一茶秀句』に、『志多良』によると、『奥信濃に浴して』と前書があるので、山深い温泉での作であろう。それだと『下下も下下下下の下国』には、暮らしの不自由さも心にあつたであろう。しかし、一茶が自分の郷国信濃に感じていたものは、それだけの

身の上のかねとしりつゝ夕涼み

ことではなかったと思われる。つまり、信濃そのものが上国でなく、下もずっと下のほうに属すると感じていたのだが、それに一茶の郷国に対する複雑な感情も絡むのだ。宮本『大観』に、「信濃の国などは下国の中でも下の下、その下の下のうちでもなお下の下にあたるというのだ。それだけに誰に気かねもいらぬ気安さもあって、裸でいてもこんな涼しいことはないという、郷里への逆説的な愛情もみられるのである」。金子『小林一茶』に、「——卑下とか卑屈とかでなくて、どうだと突きつけている印象ですね。リズムを調子よく工夫しているし、『涼しさよ』でサツサとはずしています」。

㊤ 文化六年句日記(6) 随齋筆記・稿本発句題叢・物見塚・希杖本句集

▽ 文化六年句日記・希杖本、中七以下「鐘と知りつゝ夕涼」。随齋筆記・発句題叢、中七「鐘としりつゝ」。物見塚、「身の上への鐘としりつゝ夕涼み」。文政版発句集、中七以下「鐘ともしらで」。

解 諸行無常の響き、それをわが身の上のこととして夕涼み、の意。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「黄昏を告ぐる寺の鐘は、又黄泉への客を送る弔歌である。知らずあの鐘に送られてこの世を去つた人々の数は！ かう思ひながらも暑き夏の一日を暮してゴーンと鐘の音を聞く頃は生き返つた様に涼味を掬しつゝ談笑に時を移したりする。明日は我身の上を弔ふ鐘の音とは知りつゝも、今日の我は只鐘の音を涼しと聞いて快い夕涼にふける。

——理に落ちた句ではあるが、偽らぬ彼の述懐であらう」。前田『古典俳句を学ぶ』に、「一句は句意・句調ともに平明で、無常を知らせる寺の夕鐘と知りつゝも、仏を頼むこともせず、泰平の夕涼みを安穩に楽しんでいることだ、というのである」。

▽ 文政版発句集、この句の次に「上総百首の郷は、東南に山連り、西北にうみ開けて、防人の備へに究竟の地なりとて、此度陣屋いとむ縄張といふこと有。其畠の瘤のやうにさし出て妨なる小家あり。主と見へて翌をもしらぬ老婆ひとり、麻をうみて居たりけるを、奉行人深く憐みて、『女子ありや』といへば、老婆いふ、『をのこひとりもちたりけるが、いつくのとし古郷をよ所にふり捨て、今は江戸の本所とやらんに人の髪ゆふわさをなすよし、風のたよりに聞侍る』とばかり涙はらひくゝこたふ。『さあらば其男呼返すべし。よろしき替地にかひがひしき家をあたへん。しかのみならず、其男には永く髪結司のゆるし文とらせて、汝には生涯一人ぶちといふを申下して、身をやすくすぐせん。あさ糸の細き稼ひをやめて、遅々たる春の日にはちりかふ花に無常を観じ、凄々たる秋の夜にはかたぶく月に西方をねがひ、明暮心任せに菩提の

種を蒔なば、なんぼうたのしからん。汝が此家このかまへのさはりになるこそ、天より汝に幸ひ下し給ふなれ。とくく爰をしりぞきあしこにうつれよ』といふに、老婆むくくとはらだたしきそぶりして、灯心つかねたらんやうなる首打ふりいふやう、『よくもあざむき給ふものかな。是はわらはが先祖よりいく世ともなく住ふるして、大事のく栖なれば、たとへ黄金星にとゞく程給るとも、我目には一碗の麦飯にしかずとこそ思ひ候へ。たゞく此はにふの小屋こそさうなき宝なれ。よしや命断るとも外へは行かじ』と、手すり足すり貝を作りてなかなぬばかりに申せば、奉行人の慈悲も今は施すべきよすがなく、『老婆のちになくひそ』とふたゞび繩はりして、つひに其家をよきて地どりなりぬ。あはれ月日の照らすかぎり露霜のおつる所に生として活るもの、たれか国命そむき奉らん。しぶときをこの者にぞありける。／月さへもそしられ給ふ夕涼み」を収む。なお、この文は『我春集』『七番日記』(文化8・5)にもみえる。また、『我春集』は、「月さへも」の句の後に、「さはいへ、そだち盛りの田畑こき捨られて、かなしむもむべ也けり」と添えている。

裏長屋のつきあたりに住す

涼風の曲りくねつて来りけり

㊤ 七番日記(文化12・6)・句稿消息・発句鈔追加

▽ 七番日記、前書「裏店に住居して」、座五「来たりけり」。句稿消息、前書「うら長屋のつきあたり二住て」。発句鈔追加、前書「裏家住居」。中七「まがりくねつて」。

解 裏長屋のそのまた裏に住んでいると、涼風も道なりに曲りくねつて、わが家にたどり着くことになる、の意。江戸の放浪時代の回想である。

▼ 川島『新釈』に、『曲りくねつて』は一寸皮肉だが、貧しさに住しながら貧しさを享樂してゐるやうな、所謂俳人らしいのほゝんな面影が見える。一茶は随分泣言も云つて居るが、米櫃に米があつて、少し小遣錢でもある間は、矢張りいゝ氣になつて、寝転んでゝも居た人だつたらうと思はれる。この句を私はそれほど哀れッぽい句だとは思はない。頼原『名作集』に、「をかしみといへばをかしみであるが、それは素直な笑ではない。やはり一茶のひがみを底にもつた苦笑である。しかしこれは一茶でなければ言へない境地だ。普通の作者であるならば、陋巷の奥までも吹いて来てくれる涼風に、素直に

讃辞を捧げて居るのかもしれない。それなら誰にでも出来る事だが、かうして思ひ切つてすねた所に一茶の面目がある」。暉峻『名句の鑑賞』に、「区画整理も何もあつたものではない。袋小路の裏長屋に吹く涼風は、如何にも曲りくねつてくるといった感じだった事でせう。一寸皮肉を言つてゐるやうですが、貧しさを貧しさとして肯定した余裕のある気持が感ぜられます」。中島『小林一茶集』に、「裏長屋の奥では、涼風も曲りくねって、弱々しく、かすかに吹込むだけである。江戸の佗住居を追想して、貧乏人の哀感を突き放して詠んだもの」。前田「新解釈」に、「裏長屋の奥に住んでみると、涼風も路地のままに曲りくねって、やっとのことでわが家に吹いてくるなあ。江戸の放浪時代を回想した句である。本来差別して吹くはずもない涼風を、『まつすぐ吹く』と『曲りくねつて吹く』の二つに分けて、貧乏長屋の路地奥に住む私の場合には後者だということがおかしい。しかしこの一茶の笑いは単純な笑いではない。自嘲の苦笑いである。『曲りくねつて』と無造作に表現しているように見えるが、貧乏長屋の雰囲気〔佇たたずまいと生活〕を生き生きと描写している」。矢羽『名句集成』に、「江戸在住時代の体験を追想したものであろう。『曲りくねつて』というところに皮肉とも自嘲ともつかない一茶独特のペーソスがにじみでている。また下五『来たりけり』と詠嘆でよみはなしたところに軽いユーモアも感じられる」。

丘の家や蓮に吹れて夕茶漬

㊦ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 発句題叢、中七「蓮二吹かれて」。発句鈔追加、中七「蓮にふかれて」。七番日記(文化10・6)、上五・中七「誰家や蓮に吹かれて」。志多良・句稿消息、上五・中七「誰宿ぞ蓮に吹かれて」。

解 蓮池から吹き上げる夕風に茶漬をすすするのは誰が子ぞ、の意。

▼ 川島『新釈』に、「一茶を煩はすまでもなく、少し俳句に身を入れた人なれば直きに出来さうに思われる句だが、さすがに中七の働きは凡手ではない。すがくしい水郷の描写である」。

萍の花よい〜爺が茶や

㊧ 七番日記(文化9・5)・稿本発句題叢・希杖本句集

▽ 七番日記・希杖本句集、中七以下「花よ来い〜爺が茶屋」。発句題叢、中七「花よ来い〜」。発句鈔追加、中七以下

「花よこよく、爺が茶屋」。

解 茶屋の足下に流れる小川。くねって流れる水面の浮草が、足下に寄って来そうで、なかなか寄らないのである。

むだ花にけしきとられて青瓢

㊦ 七番日記(文化9・7)・株番・稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

▽ 文政版発句集、中七以下「気色とられし瓢かな」。希杖本句集、中七以下「気色とらるゝ瓢かな」。

解 大柄な白い花が咲きそろった瓢棚だが、その無駄花に影をひそめてしまった青瓢である、の意。

団扇はつて先そよがする萍かな

㊧ 嘉永版発句集初出

▽ 座五は「律かな」の誤りであろう。文化句帳(文化2・4)・稿本発句題叢、上五「団張て」、座五「律哉」。御桜・一茶

園月並、上五「団扇張て」、座五「律哉」。発句鈔追加、上五「団扇張て」、座五「律かな」。希杖本句集、上五「団張て」、座五「律かな」。

解 団扇の紙を張り替えて、縁先にはびこった律にまずあててみる、の意。

臼井峠にて

信濃路の山が荷になる暑かな

㊨ だん袋・文政版発句集

▽ 上五・中七「しなの路の山が荷二なる」。文政版発句集、前書「碓氷にて」上五・中七「しなの路の山が荷になる」。

解 信濃路は高い山々を背負って、それだけでも暑さを感じさせる、の意。

路の葉にぽんと穴あく暑かな

④ 七番日記(文化12・6)・文政版発句集・希杖本句集

▽ 七番日記、中七「ぼんと穴明く」。文政版発句集、座五「暑哉」。

解 蔀の葉に「ぼんと穴」があいている。虫害による蔀の葉を貫通したその穴を、この「暑さ」にと詠んだ。

▼ 川島『新釈』に、「虫害のために蔀の葉に穴があいたのである。少し気をつけて見ればよく出逢ふ景色で、別段新しい見つけ処といふでもないが、たゞ、眼前の景色をそのまま、何のこだはりもなく気分の中に取入れて居ることは、矢鱈に真似られない境地である。蔀の葉に穴のあいて居るのを見ても暑苦しいとか何とか説明したいものであるが、理屈なしに、目前の景色にホッと気分を吐かけて居る。そして又理屈なしに作者の気分がそっくり受入れられる。長い修練に依つて達し待た句境ではあるが、斯ういふ句を見ると、私達の持つ不完全な言葉の多数が寧ろ呪はしくなる」。勝峯『名句評釈』に、「暑さ凌ぎのいたづら半分、蔀の葉をもぎつて掌にのせて、上からぼんと叩くと、それにぼんと応じて葉に大きな穴があく。それが又暑いと云ふので、暑さ凌ぎのいたづらが、却つてよけい暑さを感じさせるところに一茶の規ひがある。蔀の葉の太陽に照されてゐる葉先は、涼しい緑色を持ちながら、何となく暑苦しさを覚えさせる。(中略)ぼんと云ふ擬音に胸のすつきりする印象を受けさうで、これを暑いと誇張するのが一茶の個性である」。

関宿舟中

暑き夜の荷と荷の間に寝たりけり

④ 八番日記(文政2・10)

▽ 上五「暑夜の」。

解 高温にして多湿、流れ出る汗をぬぐいながら船底の荷の間で一夜を明かしたこともあった、の意。

米直段^(値)ぐつくとさがる暑かな

④ 嘉永版発句集初出

▽ 文政九・十年句帳写(文政9)、「穀直段どかく下るあつさ哉」。希杖本句集、「穀直段^(値)どかく下る暑さ哉」。

解 暑い日が続く、この分では豊作にちがいない。気温の上昇に反比例して、米の値段はさがっていく、の意。中七「ぐつく
とさがる」に、暑さのきびしさが表現されている。

兎角してはした夕立ばかりなり

㊦ 嘉永版発句集初出・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 発句鈔追加、上五「とかくして」。希杖本句集、上五「とかくして」、座五「ばかり也」。稿本発句題叢、上五「とかくして」、座五「ばかり哉」。

解 連日夕立の襲来を告げる雷音。それはものものしいのだが、降る夕立は「はした夕立」というべきものばかりだ、の意。

あとからもまたござるぞよ小夕立

㊦ 七番日記(文化10・5)・志多良・文政版発句集

▽ 七番日記以下いずれも、上五・中七「迹からも又ござるぞよ」。

解 ぱらぱらと降ってやんだ小夕立。向の空では雷音が続いている。これで上ったのではなく、またすぐに「ござる」ぞ、小夕立は、の意。

夕立や行灯直す小縁先

㊦ 八番日記(文政2・6)

解 行灯の掃除をしている縁先に、予想もなかった夕立が降り込み、あわててそれを部屋の中へ持ち込む。そのあわてようを詠んだ。

蟻の道雲の峯よりつゞきけり

㊦ 八番日記(文政2・6)

▽ 梅塵本八番日記(文政2)・おらが春・文政版発句集、座五「つゞきけん」。文政九・十年句帳写(文政9)・希杖本句

集、座五「つゞく哉」。

解 青く晴れわたった夏空のあなたに、むくむくとわき起る白い入道雲。足もとから延々と続く黒い蟻の列。この蟻の列は、あの雲の峰から続いているようだ、の意。題材の大小を逆転させ、足下の蟻の列が大河にも見えるような特異な感覚的把握である。

▼川島『新釈』に、「私はこの句から非常に悠長な、寧ろ気だるい気分を受取る。例えば、作者は青草の上にもどつさり」と腰を下して、遙の野の果てに立つ雲の峰にうつとりと見入つて居る。その眼を静かに静かに足許の草地に移すと、其処には、雲の峰と作者の視界を繋いで、倦むことない蟻の残が続いて居る。炎天の蟻の列は、時として人の心を焦燥に、時として空想に導いて行く。『続きけん』といふ推量と詠嘆を含む坐五は、蟻の列と共に曳かれて行く真夏の夢を思はせる。作者の夢は暫く蟻となつて、遙に野を越えて雲の峰の中にまでさ迷つて居る。然し、発想動機の微弱な故か、人の心を共に夢に引入れて行くだけの力はない。勝峯『名句評釈』に、「蟻の長い行列を見ない人には、かうした句の味はほんたうにわからぬ。何処からどう出て来るのか無数の蟻が二三列になつて、何処から何処までも続いている。その路をつけて行つて見ても、何処から始まつて何処で終つてゐるか分からぬ。(中略)之を『雲の峰より続く』とはこれも奇想天外、一茶の発想の大膽なのにそして無邪気なのに共鳴する。頤原『名作集』に、「庭の沓脱の上に蟻が行列して居る。見るとそこから敷石までつゞいて居り、そこまで行つて見ると、又向うの垣根までつゞいて居る。そこから先まだ何処までつゞいて居る事だらう。それから垣根の外の畠に出、道を横ぎり橋を渡り、蜿蜒として延びた末は、あの遠くの雲の峰までつゞいて居るのではなからうかといふのである。奇想天外より来ると評してもよいが、一茶の童心がこの詩人らしい空想を生んだのである」。暉峻『名句の鑑賞』に、「何処に始まり何処に終つてゐるのか計り難い。その計り難い思ひを眼前に聳ゆる雲の峰に結びつけた、一茶の大膽な幻想なのであります。勝峯『評釈おらが春』に、「草をもぐり、樹を繞り、岩を迂回してはてしもないが、あとから又あとから繰りだして行く。蟻よ、どこまで行く。蟻よ、どこから来る。あの遠い、高い、ぬつくり棒立のやうな雲の峰から、この道を歩きつゞけてゐるのだらうか。雲の峰からどこへ、その焦点をあはせるものがないので、いよく長い距りと、空間的存在を示唆するのである。『けん』の疑ひは、こゝに積極的な効果を持つこととなる」。川島『おらが春新解』に、「もくもくと立つ雲の峰が、はるかに作者の視界を占領している。野中の松の根方にでも憩うている作者は、うつとりとした目を静かに足もとの草地に移すと、そこには雲の峰と作者をつないで、倦むことない蟻の列がつづい

ている。日はかんかん照りつけているのである。もうろうとなってくる作者の意識は、しばらく蟻と共に野をこえて雲の峰の中にまで迷っていくのであったろう。荻原『おらが春新釈』に、「蟻がその巢からはい出して、一行に行列をつくってゆく、それが蟻の道である。その蟻の道は何か目的があつて、道をつけたいのだらうが、こちらへ、こちらへと続いている。そして、その巢と思われるものは、よほど遠くにあるらしい。そのほうを見ると、夏らしい雲がむくむくと立っているという意味」。加藤『秀句』に、「蟻が蜿蜒と列をなしているのを蟻の道とか蟻の列とかいうが、一茶はその果てなくつづいている感じに、幻想的な恍惚を覚えたのであらう。この蟻の道はあの果てしれぬ雲の峰からつづいていたのだらうということなのである。(中略)蟻の道が雲の峰へ向つてつづいていてではなく、雲の峰からつづいていたのだらうということに味がある。気の遠くなるようなはるかなものの中から生まれて、今この現実の一点を過ぎていく蟻の道。この蟻の道はまたはるかな未知の世界を一茶に暗示しているのであらう。この遠近の無限なへだたりこそ、この句の魅力となっているのだ」。丸山『小林一茶』に、「まことに意表を突いた奇抜な表現である。遙か地平の果てに、ぽつりと白い雲の峰。えんえんと続く黒い蟻の列。しかもこの句では、雲の峰は小さく遠景に押しやられて、その画面の一番奥から出てきた蟻の列が、次第にクローズ・アップされて、前面に大きくせり上がってくる。シネマスコープの一面面でも観るような立体感がある。いわば大を小に小を大に、対象の尺度を強引に逆転させた所に、思い切ったデフォルメが施されているわけだが、この対象の不調和から、人を食った一種の諧謔性も生まれてくる。栗山理一博士は、このような一見奇矯ともいえる機知的表現は、同時代の北斎の絵などにも共通して見られる特色だと言われる(注、栗山『小林一茶』の「菜の花のとつぱづれなり富士の山」「夕不二に尻をならべてなく蛙」の評釈における指摘)。宮本『大観』に、「この蟻の列はあのはるかな雲の峰から続いてきているのであらうかという真夏の白昼夢にも似た雄大な幻想にさそい込まれるような風景であるが、白い大きな雲、黒い小さな蟻と、不自然な誇張でなく不思議な感覚をもって迫ってくる句である」。前田『新解釈』に、「暑い夏空のもとに黒い蟻の列がえんえんと続いている。はるか地平線のかなたに入道雲が見えるが、あの雲の峰からここまで続いているのかも知れない。大きい素材(雲の峰)を小さく、小さい素材(蟻)を大きく逆転させて、同一画面に对象的に描いた奇抜な着想の句である。二つの素材は下五「つづきけん」によって接続し、『蟻の道』の最後部は虚空のかなたの『雲の峰』に続いているのであらうとする白昼夢には、幻想的な美しさがあり、一茶の詩質の多様さを示している」。

湖水から出現したり雲の峰

㊤ 文政句帳(文化6・6)・ほまち畑・文政版発句集

▽ ほまち畑、この句を立句とした一茶・知洞・文虎・其秋の五吟歌仙を収める。その末尾に「文政六年六月十七日」。

解 晴れわたった湖の上空に湧き起った入道雲。それを湖水から「出現した」と感覚的に把握した。入道雲の「動」、それを生んだ湖水の「静」の対比にも一茶の独自性が出ている。

投出した足の先なり雲の峰

㊤ 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息・文政版発句集

▽ 七番日記・志多良・句稿消息、中七「足の先也」。

解 大の字に寝て、その投げ出した足の先にもくもくと湧き起る入道雲がある。前出の「蟻の道」と類似の手法である。

▼ 黒沢『研究』に、「なげ出した足のさきに遠く雲の峰が動いてゐるといふのです」。勝峯『名句評釈』に、「『投出した』もやはり仰向に寝て投出した足であろう。仰向になつて眼を足の方にやる、その視線の彼方に、むくくと聳え立つ雲の峰が有るのであらう。一茶的叙景である」。栗山『小林一茶』に、「意表をつく奇矯な構図」「いわば不調な対照のもたらす違和感に俳諧の諧謔味が生れてくる」ことなど、「菜の花のとつばづれなり富士の山」「夕不二に尻をならべてなく蛙」と「その機知的な構図のねらいは同断であらう」。丸山『小林一茶』に、前出の「夕不二」「菜の花の」の句、「梅鉢の大挑灯やかすみから」とともにこの句をあげ、「大を小に小を大に、対象の尺度を強引に逆転させたところに、大胆なデフォルメの手法が見られ、この極端な対照の不調和から、人を食った一種の諧謔味が生まれてくる。これらは、一茶特有の視角と、無造作な誇張的表現とが、一つになつてもたらされたものと言えようが、いずれにせよ、この特異な感覚的把握と大胆な表現とは、俳句技法の上に斬新な視点を持ちこんだものとして、注目に価する」。

川狩のうしろ明りやむら木立

㊤ 稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

▽ 享和句帳(享和3・12)、中七以下「うしろ明りの木立哉」。

注 「川狩」は、夏川の魚をとること。川獺。これは薄暮の川獺。

解 川の岸边に生えた木々の間から、薄暮の明りがかすかにさしている。

川がりや地蔵のひざの小わき差

㊦ 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息・文政版発句集

▽ 七番日記、座五「小脇差」。志多良・句稿消息・文政版発句集、中七以下「地蔵の膝の小脇差」。

解 川縁の地蔵の膝に「小脇差」を預けて川獺にふけているのである。

玉川

萩もはや色なる浪や夕はらひ

㊧ 文政句帳(文政8・6)

▽ 七番日記(文化15・6)、中七以下「色なる波ぞ夕被」。

解 夕被が行なわれている玉川べりの萩は、花をつけて夕風になびいている、の意。

麻の葉に借錢書て流しけり

㊨ 七番日記(文化10・5)・志多良・句稿消息

▽ 志多良(二・三||重出)。

注 「麻の葉」、夏被で、麻の葉を切り、幣の代りに川へ流した。

解 できることなら、ついでに麻の葉に借錢の額を書いて流したい。それができれば本当の夏被というものだ、の意。

形代をとく吹ふるせ萩すゝき

㊦ 嘉永版発句集初出

▽ 中七「とく吹なくせ」の誤りか。稿本発句題叢、中七「とく吹なくせ」。発句鈔追加、中七以下「とくふきなくせ萩芒」。注「形代」(かたしろ)、陰陽師・神官などが禊や祈禱の際に用いる人形(ひとがた)。白い紙を切って作る。禊のとき、それで身体をなでて、その災いを移し、川などに流す。ひとがた・なでもの、とも言う。

解 水に流した形代、それがなかなか流れて行かない。川端の萩・芒よ、早く川下へ吹きやってくれ、の意。

形代にさらばくをする子哉

㊦ 文政句帳(文政8・6)

解 川に流した形代に対して、「さらばく」と手を振っているのである。

灯籠のやうな花咲御祓かな

㊦ 七番日記(文化10・5)・志多良(重出)・句稿消息・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 七番日記・志多良・句稿消息・希杖本句集、中七以下「やうな花さく御祓哉」。

注 「灯籠のやうな花」、水面に浮かぶ形代をいう。

解 お祓に用いた形代が川へ流され、それが灯籠流しの灯籠のように水面に白く浮いている。

一茶発句集 下

秋の部

秋立や隅の小隅の小松島

⑩ 株番(文化9)・文政版発句集

▽ 中七「隅の小すみの」。

解 中七以下「隅」に「小隅」、「小隅」に「小松島」を言い掛けた言語遊戯である。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「『小松島』は普通名詞と見てよいであらう。立秋の気の至らぬ隅なきを詠んだのであるが、この句はむしろ句調そのものが主になつてゐる。『隅』と『小隅』が脚韻をなし、『小隅』と『小松島』が頭韻をなし、調子が非常に円転滑脱で、一茶のものとしては珍しい小才の利いた器用な措辞法である」。

狗子有仏性

秋来ぬとしらぬ狗が仏かな

⑪ 文政版発句集初出

▽ 八番日記(文政3・7)、前書「有狗子仏性」。上五「けさ秋と」、座五「仏哉」。

注 「有狗子仏性」、「無門関」に、「狗子ニ仏性アリヤ否ヤ」(第一)。

解 人は「秋来ぬ」などと心動かすが、そんなことに全くかかわりを持たない犬の心は平静である。俗諺に、「知らぬが仏」。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「古今集の『秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる』が暗に引かれてあると見ても、又見なくてもよいであらう。信仰にはとかく知識が邪魔になる何のかの知らぬが仏である。人間界ではあれこれのと、とかく迷を起させる。犬にはそれが無い。その迷のないのがその身そのまゝ仏であると、実は狗にのみ限らぬが、狗子仏性の語を藉りて不立文字の信仰を説いたのである」。

星さまのさゝやき給ふけしき哉

⑫ 句稿消息(文化年中)・文政版発句集

注 「さゝやき給ふ」、輝く星の擬人化。

解 澄んだ秋の夜空の下、月光に映し出された景色。星もその美しさをささやき合っておいでだ、の意。

禪に笛つきさして星むかひ

㊦ 稿本発句題叢

▽ 稿本発句題叢、中七以下「笛突きさしてほし迎ひ」。七番日記(文化11・7)・発句鈔追加・希杖本句集、「ふんどしに笛つきさして星迎」。

解 ふんどしに笛を無造作につきさした男が行く。今夜は七夕、彼も星迎えに出たのだ、の意。

▼ 川島『新釈』に、「夜を籠めて遊び興じる七夕の夜、吹きさらした笛の手を止めて、無造作に禪につきさして、がつしりとした腕を組んだ裸形の男が屹と星合の空を仰いで居る。男を中心として、銀河の中天にかゝる暗碧の星空と、足許から続く野もせの、秋冷の気の津々たるを覚える。頗る原始的な剛健な風趣である。然し、原始的とか男性美とかいふ特殊の観念を構成して居なかつた昔の人としては、この句も大した意味で詠まれたのではなく、たゞ眼前の景情に興味を引かれたのであらう。それだけに、巧まれたらしい迹のないことは嬉しい」。金子『小林一茶』に、「こうした題材への嗜好は、山国生れ一茶にとっては、むしろ本来的なことなのだが、彼の俳諧への姿勢が固まるにつれて、しだいに意識的に、その嗜好を膨張させるようになったことも事実である。芭蕉や蕪村への抵抗が潜在していたかもしれない。芭蕉の正格に対する奇の意識が、蕪村の文人的雅語に対する日常的俗語の意識が、働いていたかもしれない」。

聾星にいで披露せん稲の花

㊦ 七番日記(文化12・7)・文政版発句集

注 「聾星」、牽牛星。彦星。

解 七夕の夜、牽牛星に披露しようとする稲の花がほの白く光っている、の意。

歌書や梶のかはりに糸瓜の葉

㊦ 八番日記(文政2・7)

注 「梶」、梶の木。ここでは、その葉。古く、七夕の祭りに、七枚の梶の葉に詩歌を記して供え、芸能の向上や恋の成就など

を祈る風習があった。

解 七夕飾りの短冊に、昔、恋の成就を祈念して詩歌を記したという梶の木の葉の代りに、糸瓜の葉を用いた、というのである。

「娶星の御顔をかくす榎かな」

㊦ 七番日記(文化12・7)・文政版発句集

▽ 座五「榎哉」。

解 榎の枝葉が繁って、せっかくの娶星の姿をかくしてしまったのである。「若葉してまたもにくまれ榎かな」(七番日記、文化11)。

七日の夜只の星さへ見られけり

㊦ 八番日記(文政2・7)

▽ 中七以下「たゞの星さい見^(え)れけり」。希杖本句集、上五「六日の夜」。

解 七夕の夜、ふだんは人の目にもとまらない無名の星までが仰ぎ見られる、の意。

星待や亀も涼しいしろつき

㊦ 文化句帳(文化2・7)・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 発句題叢・希杖本句集、前書「不忍池」。発句鈔追加、座五「後つき」。

解 七夕の二星を待つように亀も天を仰いでいる。そのうしろ姿が涼しそうに見える、の意。

子宝が蚯蚓のたるぞ梶の花に

㊦ 七番日記(文化11・7)・文政版発句集・希杖本句集

▽ 座五「梶の花に」は、「梶の葉に」の誤り。七番日記・文政版発句集・希杖本句集とも「梶の葉に」。全集本『七番日

記』、中七「蚯蚓かたるぞ」と校訂するが、講談社版の複製本及び『全註一茶七番日記』により、「蚯蚓のたるぞ」とする。
 注「子宝」、ここでは子供、の意。「蚯蚓のたる」、蚯蚓が這った跡のような文字、それを書くこと。
 解 幼児が七夕飾りにつるす梶の葉に蚯蚓が這ったような文字を書いているのである。

病中

うつくしや障子の穴の天の川

㊤ 七番日記(文化10・7)・志多良・句稿消息・文政版発句集・希杖本句集

▽ 七番日記、中七以下「せうじの穴の天川」。志多良、前書「七夕同(病中)」、中七「せうじの穴」。句稿消息、前書「病」、中七以下「せうじの穴の天川」。希杖本句集「病中」と前書した「下駄からりく夜長のやつら哉」の次にこの句を収める。

注「病中」、文化十年六月十八日以降、善光寺の桂好亭に滞留中、悪性の癩かさをわずらい、七十五日間病臥した。
 解 今夜は七夕、障子の穴からながめる天の川も、いつもとは違って、更に美しく見える、の意。閉された病臥から障子の穴を抜けて、豁然たる天空に思いをやる。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「ちつと床についてゐる所在なきに天井の節穴を数へたり、障子の破れ穴をいつまでも覗き込んでゐる。するとその障子の穴から天の川の星雲が美しく一茶の目に入った。破れ目を額縁にして、いつく迄も見てゐる一茶であつた」。川島『一茶集』に、「これは善光寺における病中吟で、障子の穴を通して見る天体の深さ、美しさに興じている。盛夏に発した癩は天高くはれるころには、もはや峠も越していたはずである」。中島『小林一茶集』に、「病中のつれづれに、障子の穴から空を眺めるのを楽しみにしている。今夜は七夕で、その穴から天の川が見える。こうしてしみじみ眺めると、なんと美しいことであろう」。加藤『一茶秀句』に、「寝ながら障子の穴のきらめきに気がつく。目を寄せて見ると燦然たる天の川の世界だ。ああ七夕だったなと考えているのである。閉ざされた病臥の憂鬱から、倏忽しゅくごつとしてひらけた夜の別世界に、『うつくしや』と呟くはかなかつたのであろう」。宮本『大観』に、「長患いの病中のつれづれに障子の穴から空を眺めると、美しい天の川が見える。今夜は七夕なのだなあと、限りなく広がった空の澄んだ美しさを障子の破れから覗

いて、しみじみした思いにふけているところが、この作者らしくておもしろい。丸山『小林一茶』に、「今夜は七夕、病床のつれづれに、障子の穴から覗くと、その穴から天の川が見える。寝たままでしみじみ眺めるその天の川の美しさ。障子の穴を額縁にして、そこから覗かれる小宇宙の深さ、美しさに、驚きかつ興じた句である」。

木曾山へ流れ込けり天の川

㊦ 文政版発句集初出

▽ 七番日記(文化15・7)、上五・中七「木曾山に流入けり」。八番日記(文政3・7)、上五・中七「古郷に流入けり」。

解 天空に流れる天の川、その一端が遠くにかすかに見える木曾山塊に流れ入るように消えている、の意。

▼ 黒沢『研究』に、「どつしりとした句であります。斯うした句の多いのは何と言つても芭蕉であらう、一茶には余りに人間的な句が多すぎなのです。然し芭蕉は俳聖とし偶像化する時代が来ても一茶には何千年経やうがそんなことはない位、生々しい。(中略)彼は即ち『感じたま』『ありのま』自己に純実な新しい道を提示したのであります。彼は凡ての方面に於て革命児として働いてゐるのです。勝峯『名句評釈』に、「木曾山は御嶽山であらう。北信の小高い処に立つて見ると西天に北アルプスの連山が壁立し、左端にや、離れて御嶽山が孤立して見える。天の川の一端が木曾山塊に流れ込んでゐるといふ雄大豪宕の写実句である。もし芭蕉の『荒海や佐渡に横たふ天の川』がなかつたら、この句も十分存在権を把持し得るであらうが。川島『一茶集』に、「黒々とした木曾山中に流れこんでいる天の川。芭蕉の『荒海や佐渡に横たふ天の川』ならぬ、これはしんしんと更けゆく無音の量感がある」。加藤『秀句』に、「少しおおまかな詠みぶりだが、木曾の森々たる松のかぐるさの上に、天の川の流れ入っている傾斜が鮮やかだ。欲をいえば、やはりこの景の中から滲み出てくる迫力がほしい」。丸山『小林一茶』に、「北信濃の小高い処に立つて見ると、西天に北アルプスの峻峰が連なり、左端にやや離れて、木曾山塊が望まれる。しかしこの句では、木曾山だけがグッと拡大されて、天の川の一端が、その中に流れこんでいる情景である。必ずしも写実だけの句ではなく、独得のデフォルメが施されている。松で蔽われた木曾の山々は、見るからに沈鬱な山相を呈しているが、その黒々とした木曾山中に流れこむ天の川の白さ。しんしんと更け行く夜空の寂寥感が、重く胸にこたえてくる」。宮本『大観』に、「森々たる松で被われた黒々とした木曾の山中に、白くきらめく天の川が流れ入るかのようにな夜空に傾斜している情景で、印象鮮明、しんしんとした静けさの中から、人の胸にしみ入るような寂寥感が迫って

くる」。

草鞋ながら墓参りして

息才で御目にかゝるぞ草の露

㊤ 七番日記(文化14・7)・文政版発句集

▽ 七番日記、前書「わらぢながら墓参」。文政版発句集、前書「わらぢながら墓参りして」。

注 「息才」、「息災」が正しい。達者であること。健康であること。「草鞋ながら」、文化十四年七月四日、一茶最後の出府を終えて、十か月ぶりに柏原に帰った。

解 このたびもまた、無事に古里の土を踏むことができたこと、墓前に合掌するのである。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「この句には句として特にすぐれた点はない。一茶はこの孝心を頭に置き、そして前書と併せ読めば、しかし何ともいへず読者を動かすものが有らう。『息才』は無事健康の義、一茶自身である。知命を五つ越した貴方の子が、どうやら丈夫にかうしてお目にかゝりに参りましたよ。かう心の中で言つて合掌する一茶の姿を想像する。折しも初秋の露があたりの草の上にしとゞにかゝつてゐる。老人一茶の目にも何かしら宿つてゐるものが有るであらう」。川島『一茶集』に、「一茶のためには最後の江戸入りをして十か月ぶりに帰った時の吟である。この時に限らず、放浪時代にも、まづ墓所をさして帰って来たのであった。ひとくれの石碑が一茶を故郷につなぐ大きな力ともなっていたのである」。中島『小林一茶集』に、「一茶は祖先を敬う念が厚く、旅先からも、菊女へ宛てて、祖母と母の忌日には、仏前に湯茶を供えることを忘れぬようにと書き送っている。また、このたびに限らず、旅先から帰って来たときは、たいてい、まず墓前にお詣りをしている」。

あの月は太郎がのだぞ迎鐘

㊤ 七番日記(文化11・9)・稿本発句題叢・希杖本句集

▽ 発句題叢・希杖本句集、座五「迎ひ鉦」。発句鈔追加、中七「太郎がものぞ」。

注 「迎鐘」、精霊祭りの際、死者の霊を迎えるといって打つ鐘。浄土真宗門徒の一茶の身の上には、全くかかわりがない。
 解 遠く、精霊祭りの迎鐘の音が聞こえてくる。空には丸い月がのぼっている。その月を指して、あれは「太郎のだぞ」と言う子である。

末の子や御墓参りの箒持

㊦ 句稿消息・文政版発句集

▽ 句稿消息、中七「御墓参の」。

解 一家で墓参りに出かける。それぞれに供華や線香などを手にしている。その中で、末の子らしい一番小さな子が持っているのは竹箒、の意。

迎火は草のはづれのく／＼かな

㊧ 文化五・六年句日記(文化6)・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 文化五・六年句日記、上五「迎ひ火は」。稿本発句題叢、上五「送り火ハ」。

注 「迎火」、盂蘭盆の初夜に、死者の霊を迎えるとして、家の門口などでたく火。浄土真宗門徒の一茶には全くかかわりがない。

解 迎火をたくのは、野末のそのはずれに住む他宗の家々、の意。

亡妻新盆

かたみ子や母が来るとて手をた／＼く

㊨ 文政版発句集初出

▽ 文政句帳(文政8・9)、「いとし子や母が来るとて這ひ笑ふ」。

注 「かたみ子」、文政五年六月十日出生の三男金三郎。翌年二月、母・きく発病。四月、他家へ預けられる。五月十二日きく

没。葬儀に呼び寄せるがひどく衰弱。改めて中島という所の乳母に預けられる。同年十二月二十一日夭折。

解 何もわからないこの幼児は、盆には母が帰ってくるぞと聞かされ、それに応ずるように「ちようち、ちようち」をしている、の意。

▼ 萩原『一茶名句』に、「前書を除いても『うら盆』の意味と解せられようとは思いますが、前書は不可欠のようである。一茶が妻(きく)をうしなったのは文政六年(六十)の夏である。『かたみ子』というのは前年三月に生れた子(金三郎)で、新盆には満一か年四か月になっている。この子は、男の手一つではどうにもならないので、赤渋の富右衛門という家へさと子に出して、やがて栄養不良のために死ぬのである。(中略)この『かたみ子』の句は芸術作品として評価する前に、一茶の悲しみと涙とがまず感じられて言うところを知らぬ気持がする。中島『小林一茶集』に、「この句は、盂蘭盆のころ、ようやく快方に向かいはじめた金三郎に逢うために、中島の里へ出かけて行ったおりの作と思われる。句意は、亡妻の忘れがたみである金三郎に向かって、さあ、お母ちゃんがこの様になって帰ってくるよ、と言って聞かすと、子供は何も知らずに、笑顔を作りながら手をたたいて喜んで、というのである。が、おそらく、これは実際にあった場面を詠んだのではなく、子どもをあやしているうちに、一茶の胸にこみあげてくる悲しみが、このような虚構の形をかりて、あらわされたものであるう。丸山『小林一茶』に、「亡妻の忘れ形見である金三郎を抱いて、『お盆にはお母さんが帰って来るんだよ』と言って聞かすと、何も知らない子供は目を輝やかし、手を叩いて喜ぶ。それを見て、一茶は胸の張り裂けるような思いであつたろう」。

鼠尾草や水につければ風が吹

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加

▽ 発句題叢、上五「みそ萩や」。発句鈔追加、上五「鼠尾草や」。文化句帳(文化1・7)、上五「みそ萩や」、座五「風の吹」。全集本、「鼠尾草」に「そびぐさ」とルビ。

注 「みそ萩」、ミソハギ科の多年草。山野の湿地に群生し、人家の庭でも栽培される。盆のころ、梢上の葉腋に淡紅白の小さな六弁花が群がって咲く。盆に供華としても用いる。宗派によっては、聖霊棚に供える洗米に、茄子や瓜などを刻んでまぜた「水の子」にこの花を束ねたもので水をそそぎかける。禊萩。千屈菜。水懸草。

解 聖霊棚に供える洗米に水をかけそごうと、束ねた鼠尾草を水につけるととき、さわやかな秋の風が吹き込んできた、の意。仏事にかかわるさわやかな心を、秋の風に托した。一茶自身の体験ではない。

▼ 川島『新釈』に、「この句は魂迎への句と並んで居るから、やはり、みそ萩の穂を茶碗の水に浸して精霊棚に手向けることを言つたのであらう。緑の葉や赤紫色の花を水に浸すと一層艶々しくすがすがしく、あたりの爽気を呼ぶやうに思はれる。途端に、そよらと冷たい風が吹いた。その瞬間の感じを、主観を強めてみそ萩の方から風が吹いたやうに言僻したのである」。

玉棚や上座して鳴きりぐくす

㊦ 七番日記(文化11・7)・稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

▽ 希杖本句集、上五「聖霊と」の右傍に「玉棚や」と書込む。

解 聖霊棚の奥の方からきりぎりすの音がしたのである。

魂送

おれが場もとく頼むぞよ仏達

㊦ 文政版発句集初出

▽ 七番日記(文化11・7)、上五・中七「おれが座もどごぞにたのむ」。

解 浄土の隅、そのまた隅でもよい、「おれ」の往くべきところを「頼むぞよ」、の意。親鸞教においては、浄土に往生した仏は、ただちに衆生の救済に向う。

精霊の立ふる舞の月夜かな

㊦ 七番日記(文化12・7)・梅塵本八番日記(文政2)・文政版発句集

▽ 七番日記、「生霊(尊)の立ふる廻の月よ哉」。梅塵本八番日記、前文「ことし七月既望爰のぬか塚山に登る。勝景はさておき、

麓の村く魂送り火焚て名残をおし^(を)み、天も隈なく晴て、仏の帰路をてらし給ふ。さながら別世界なりけらし」。中七「立振舞の」。

解 八月十六夜、何とも美しい月夜である。浄土に帰って行く聖霊の出立を記念する振舞い月夜と言ふべきだ、の意。

山里やあゝのかうのと日延盆

㊤ 文政句帳(文政7・7)・高井郡四人衆(雲里・楚江・邑雪・貞淳)あて書簡・文政版発句集・希杖本句集

▽ 文政句帳・希杖本句集、中七「あゝのこ^(かう)をと」。

解 のんびりした山里では、盆が過ぎても、申しわけをしながら、盆の気分を日延べしている、の意。

べつたりと人のなる木や宮角力

㊤ 七番日記(文化14・8)・文政版発句集・希杖本句集

解 村の力自慢が集まったの宮相撲。土俵のまわりの木には鈴なりの見物人。解放のひとつときである。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「正にこれ田園行事の一笑景。『宮角力』は村の祭などに神社の境内でとる素人角力である。土俵の周囲はぎつしり見物人で埋つてゐる。設備が設備ゆゑ後方の者はいくらせい延しても見えない。周囲の木に登つて見る者がまるで人間の果物をつけたやうにべつたり鈴なりになつてゐる」。